第 94 号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：伊藤悦朗副病院長）
〒036－8563　弘前市本町５３
TEL：0172－33－5111（代表）
FAX：0172－39－5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2019年（令和元年）6月21日

病院長からの一言
楽しく働こう改革

弘前大学医学部
附属病院長　福田 眞作

平成30年３月の厚生労働省医政局長通知により，「医師の労働時間短縮に向けた緊急的な取り組み」が各都道府県知事を介して医療機関へ通達されました。本院においても，（1）医師の勤務時間把握に係るWG，（2）医師の業務改善に係るWGを設置，また，本院の大きな問題でもある看護職員の負担を軽減するため，（3）看護職員の業務改善に係るWGを設置し検討していただき，その答申に基づき以下の対応を実施，予定しています。

医師の勤務時間の把握については，まずは医師の在院時間（出勤時間および退勤時間）の客観的な把握を行うこととしました。ご存じのように大学病院で働く医師の業務内容は，診療，教育，研究，社会貢献であり，通常の病院と比べると極めて多様な働き方をしています。そして，「医師の自己研鑽」をどこまで労働とみなすかによって労働時間は大きく変わってきます。「労働に該当しない研鑽」とはどういうものかが厚生労働省から明示されるまでの間は，在院時間の把握に努めることとしました。残念ながら，現行の就業時間管理表は引き続き継続されます。お手数をおかけしますが，何卒宜しくお願いいたします。

医師の業務改善については，本院が取り組むべき14項目及びその対応部署等について通知した通りです。医師事務作業補助者の増員，患者搬送時のエレベーターの効率的運行，時間外・休日のインフォームドコンセントの原則中止など，順次実施しています。その他の項目も含め，達成状況やその効果について年度末に検証したいと考えています。

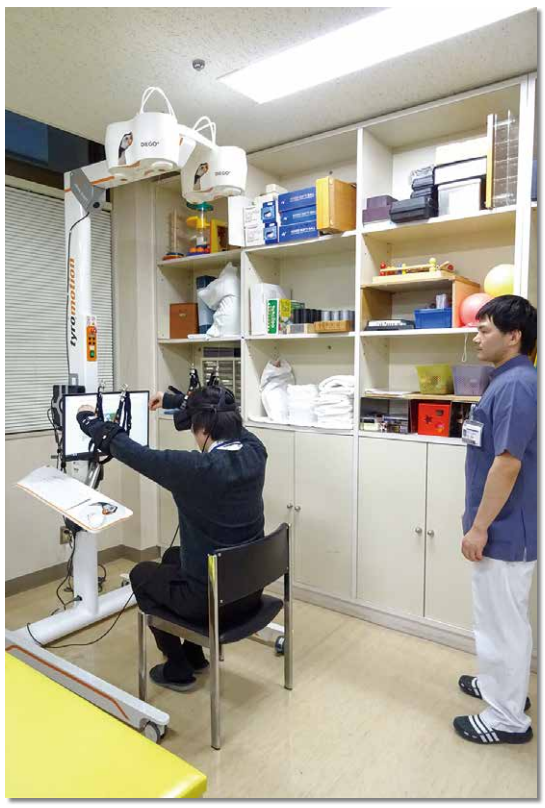
看護職員の業務改善については，WGから非常に多くの提案をいただき，すでに各部署に対応をお願いしています。医師や薬剤師等の協力や共通認識が必須な事項がほとんどであり，是非とも，各部署の中で，前向きな協議を重ねていただきたいと思います。

今年も院内巡視を行っておりますが，皆さんからの不満や要望が少なくなったように感じます（気のせいではないと思うのですが…）。笑顔で日々の業務を実施できるような「楽しく働こう改革」を，これからも皆さんと一緒に模索していきたいと思っております。

全国２番目，VRリハビリテーションロボットを導入

平成31年２月に弘前市の補助を受け，全国２番目となるリハビリテーションロボットDIEGO®が導入されました。この機器はvirtual reality（VR：仮想現実）を用いて上肢のリハビリテーションを行えるという最大の特徴があり，近年テレビゲームを中心に世界に広がっております。本機器のVRには「洗濯物を干す」動作や「リンゴを収穫する」といった日常生活に近いプログラムが組み込まれております。また，上肢挙上をアシストするシステムも備わっており，何らかの理由で腕が挙がらない患者さんに対し，術後・受傷早期より上肢挙上をアシストし，より日常生活に近い形でのリハビリテーションの提供が可能となります。更に，VRのみならず20種類以上のゲームが組み込まれており，ゲームのレベルも10段階まで設定が可能であるため，患者さんの症状や，その日の気分によりリハビリテーションを変えることも可能となります。

患者さんが実施したゲームは点数として画面上に表示されるため，リハビリテーションの効果を可視化することが可能となり，リハビリテーションのモチベーションを高める効果も期待されております。平成31年４月までには，計12名の患者さんがDIEGO®を使用しており，患者さんからは非常に好評で，「日常生活に近い場面でのリハビリテーションを行え，夢中で行ってしまう」，「回復段階が目に見えるのでやりがいがある」といった意見も得られております。



今後，高齢化社会に伴いリハビリテーションの需要が更に高まることが予想される現代社会において，このような新たな取り組みはリハビリテーション医療を発展させるであろうと思われます。しかし，導入先がまだ少ないため，適応疾患やVRを使用したリハビリテーション効果は解明されておりません。今後，このような課題を解明することで，青森県のリハビリテーション医療の発展に寄与できれば良いと考えております。

（医療技術部リハビリテーション部門　西村信哉）

ICT技術を利用した先端医療機器を導入

平成31年２月に「弘前市ICT技術活用先端医療体制整備事業費」を活用し，汎用画像診断装置用プログラム「Join®（ジョイン）」を導入しました。

Join®はCT，MRI等の医用画像を携帯端末等で閲覧するためのアプリケーションであり，「医薬品医療機器等法」における医療機器プログラムとして認証されていることから，セキュリティ面においても安全に使用することが可能となっております。

弘前市は，脳血管疾患や心疾患などの重症化や長期化の防止又は抑制に寄与するため，市内の救急体制の充実を目的として，本院を含む国立病院機構弘前病院，弘前脳卒中・リハビリテーションセンター，健生病院の計４病院に対しJoin®導入の支援を行いました。現在，本院では心臓血管外科，放射線診断科，脳神経外科，放射線部，高度救命救急センターの５診療科・部門に配置し，試行的な運用を行っております。Join®の導入により，休日・夜間において当直医が画像所見の判断に迷う際，迅速かつ簡便に上級医や専門医へアドバイスを求めることが可能となります。さらに，Join®を導入している医療機関からの転院等の際は，患者搬送の前に放射線画像の確認が可能となることから，患者の受入から処置まで円滑に行うことが期待されます。

平成31年４月には，Join®の導入状況の視察のために櫻田宏弘前市長が来訪し，その重要性を更にご認識いただいたところであります。

今年度は，弘前市が取り纏め役となって，市内４病院の連携体制の構築を進めていく予定であり，体制が充実することで，より一層，弘前市の救急医療体制の強化に繋がることと期待しております。

（経営企画課）

令和元年度体制スタート！

昨年度に引き続き，副病院長に小児科学講座 伊藤悦朗教授，泌尿器科学講座 大山力教授，病院長補佐に総合診療医学講座 加藤博之教授，内分泌代謝内科学講座 大門眞教授，麻酔科学講座 廣田和美教授，整形外科学講座 石橋恭之教授，看護部 小林朱実看護部長が就任しました。

副病院長
伊藤　悦朗
小児学講座
教 授

副病院長
大山　　力
泌尿器科学講座
教 授

病院長補佐
加藤　博之
総合診療医学講座
教 授

病院長補佐
大門　　眞
内分泌代謝内科学講座
教 授

病院長補佐
廣田　和美
麻酔科学講座
教 授

病院長補佐
石橋　恭之
整形外科学講座
教 授

病院長補佐
小林　朱実
看護部長

先憂後楽

叱るということ

医事課長　奈良正裕

２年程前のことですが，アーティスティックスイミング（旧シンクロナイズドスイミング）の日本代表ヘッドコーチである井村雅代氏の講演を聴く機会がありました。タイトルは「人を育てる～愛があるなら叱りなさい～」。井村氏の名前を聞くと，多くの方は「いつも怒っている」「怖い人」という印象をお持ちではないでしょうか。

一時期は他国の指導者となり，日本代表ヘッドコーチに戻って来た時のエピソードでは，今の若い人達は「言葉の意味を理解していない」「伝わらない」とのことでした。選手達が使用しているロッカーを見てみるとあまりにも汚く，整理整頓をしましょうと話し，選手達は片付けたつもりだったようですが，井村氏からみるとひどいあり様だったそうで，選手が練習している間に自ら選手達のロッカーの整理整頓をしたそうです。それを見た選手達は本当の片付けとは何かと気付くわけです。重要なポイントを教え込むことが大切だということのようです。そして，叱る時はその場（現行犯）で叱り，過去のことは持ち出さない。叱られた者は今のことは反省するが，昔のことを言われると反省より反発する気持ちになる。また，単刀直入の分かりやすい言葉で言い，しつこく叱らない。ということだそうです。オリンピックでメダルを獲るための激しく厳しい練習の中で，本当は選手達のことを思っての叱りだと強く感じました。

私の話ですが，若い頃はよく叱られていました（指導をいただきました）。諸先輩方からの指導は，一人前の職員になってほしいとの愛情であり，当時は自分でも反省していたことを思い出します。それがあったからこそ今の自分があると思っています。

今の時代，指導の難しさを感じている方も多いと思います。本当はハッキリ言いたいけれど「パワハラ」にならないか気に掛かっていませんか。でも，愛情を持って叱る時は叱りましょう。その人の未来のために。

新任科長の自己紹介

脳神経内科科長　冨山　誠彦

本年４月１日付で脳神経内科科長を拝命しました。自己紹介を兼ねて就任のご挨拶を申し上げます。

私は静岡市の出身で，甲子園に度々出る静岡高校の卒業です。高校卒業後，一度は雪の降る街に住んでみたいと思い，弘前大学に進学，卒業と同時に青森出身の同級生と結婚，また当時の第三内科に入局しました。そのような縁で青森に住みつくこととなり，すでに三十有余年がたちました。

長らく弘前大学におり，神経内科の立ち上げにも参加させていただきましたが，10年前に青森県立中央病院に異動し，臨床の第一線で働いてまいりました。県病で脳卒中ケアユニットを開設する時期に責任者となったことが縁で，県病が脳卒中診療の中核病院として機能する姿を見届けられたことは，何よりの喜びでありました。また難病診療につきましても，地域の自治体病院の先生や青森県の協力を頂き，少しずつではありますが整備を進めてきました。

このように万能型？脳神経内科医として働いてきましたが，専門はパーキンソン病です。パーキンソン病が他の変性疾患と違う点は，治療が進んでいるということでしょうか。まだ根治療法はありませんが，対症療法はかなり進んできています。言い換えれば，諦めずに丁寧に治療すれば患者さんの状態をかなりのレベルでよくすることができる，ということです。ただ診療に時間がかかることが欠点です。十分な診療時間を確保するためにも，医療連携を考えて行く必要があると思っています。

脳神経内科は４人で再出発しました。他院で後期研修中の医師もおり，来年度には今よりは人的にゆとりが出てくると思っています。弘前にきて，毎日学生さんと触れ合う機会ができ，楽しい時間が増えました。何よりも，街の間から垣間みる岩木山の美しさには見慣れた景色とはいえ感動を覚える毎日です。今後とも皆と一緒に学び，脳神経内科を志す医師を募り，そして青森県の脳神経内科の発展のために努力してまいりたいと思います。これからもご指導，ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任部長の自己紹介

医療技術部長　塚本　利昭

今年度より２年の任期にて医療技術部長を拝命いたしました。就任にあたり自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。

私は八戸市に生まれ，高校卒業後は高知市にある理学療法士の養成校に入学し，臨床実習は高知医科大学（現：高知大学）をはじめ佐賀県と福岡県で行いました。昭和60年，奈良市にある東大寺整肢園（現：東大寺福祉療育病院）に就職し，脳性麻痺の子どもさんや整形外科疾患に関わりました。その後は，天理市にある救急病院でのリハビリテーション科の立ち上げと外傷・脳血管障害・スポーツ障害の急性期に関わり，平成３年に国立療養所岩木病院（現：国立病院機構青森病院）に参りました。岩木病院では筋ジストロフィーにおける筋力評価法や運動機能，および，本学出身の整形外科医，大竹進医師が日本で初めて神経筋疾患に対して導入した鼻マスクによる間歇的陽圧換気（NIPPV）の普及と研究に関わることができました。平成９年から本院へ赴任し，臨床では投球障害肩や野球肘，膝前十字靱帯損傷などのスポーツ障害に関わり，基礎では社会医学講座の研究生として９年間在籍し，岩木健康増進プロジェクトにも10年間FVC測定などに関わって参りました。

平成25年度に医療技術部が組織され，平成27年度から２年間医療技術部長を務めさせていただきました。この度２度目の拝命となります。理学療法士として昭和，平成，そして令和と医療に携わって参りました。医療技術部長としての責務を果たしつつも，患者と向き合ってきた臨床家としての思いを忘れず，各診療科の先生方のお力をお借りし，そして，先生方のお力になれるよう，医療技術部スタッフの知識や技術向上の支援と，人間性の涵養を図り，医療，および病院経営に資するよう努めて参ります。

医療技術部が組織されて７年目という，やっとランドセルを背負って歩いているような若い組織であります。どうぞ，今後ともご指導，ご鞭撻のほど，よろしくお願い申し上げます。

各診療科等の紹介

【整形外科】

整形外科は身体運動に関わる骨，関節，筋肉，神経系などの「運動器」の疾患を扱う診療科で，運動器の機能的改善を重視して治療しています。昨年の診療実績は外来患者数：約100名／日，新患数：約1,500名，手術件数：約940件（全身麻酔下550件）と，多くの外来診療と手術治療を担当しています。治療対象が運動器全般と幅広いため以下の５つの専門グループに分かれて診療にあたっていますので簡単に紹介します。

「脊椎グループ」は脊椎・脊髄の外傷や変性疾患のほか，脊柱側弯症の治療を行っています。手術では術中CT撮影装置を用いたナビゲーション手術を導入し，正確で安全な手術につとめています。「手外科グループ」は主に手・指の外傷や変性疾患を扱っています。外傷では指切断の再接着などで力を発揮していますが，腫瘍切除や外傷による組織欠損を再建する手術も行っています。多指症など手の先天性疾患のほか，先天性内反足の治療も行っています。「スポーツグループ」はスポーツによる外傷・障害に加え，膝・肩関節を中心とした変性疾患を扱っています。手術は前十字靱帯再建術を多く行っていますが，スポーツ障害に対してはリハビリテーション科と連携しながら保存治療も行っています。また，自家培養軟骨移植術の治験を行っております。「関節グループ」は主に股関節・膝関節の変性疾患を扱っており，人工股関節手術では筋間アプローチにて早期機能回復を目指しています。また，小児の股関節診療も担当しています。二次救急輪番の増加に伴い，高齢者の大腿骨近位部骨折の手術も増えております。「腫瘍グループ」は骨や軟部組織に発生する腫瘍を扱っています。唯一悪性腫瘍を扱うグループで，化学療法や手術治療を行っています。発生部位によっては他科に連携していただき手術治療を行っています。

近年，健康寿命を伸ばすため運動器の健康維持に注目が集まっており，今後も当診療科の責任は増していくと思われます。当診療科の治療は，他の多くの診療科や部門の支援がないと成り立ちませんので，今後ともご支援の程よろしくお願いいたします。

（整形外科学講座　准教授　山本祐司）

看護の日

5月12日は「看護の日」です。近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ，1990年に制定されました。日本看護協会では５月12日から5月18日までを看護週間として，「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに，全国各地で気軽に看護にふれることのできる楽しい行事が開催されました。今年のポスターには，医療的なケアが必要な児を支える看護職を描いた「看護は変わる。未来のために。」をメインコピーに，看取りだけでなく，医療が必要な方たちがより良く生きていけるようにサポートする看護職が表現されていました。

本院看護部でも５月７日から13日まで，正面玄関中央待合ホールに「看護の日のお花」を展示しました。今年のテーマ『ナチュラル』のとおり，アーチ型のグリーンを主体に５か所に配置されたお花は，シンプルながら香りがよく上品な雰囲気と自然が感じられると評判でした。また，入院患者さんには，受け持ち看護師が５月10日にメッセージカードを作成しお渡ししました。メッセージカードは，５月のさわやかな青空と可憐なスズランの花が印象的なシンプルな構図で香りが漂ってくるようでした。第一病棟３階では毎年，子どもが喜ぶキャラクターシールを貼ったり，絵を描き，ひとり一人にメッセージを添えてカードをお渡ししています。受け取った子どもたちや家族の方から感謝や励ましの言葉が寄せられ，私たち看護師も元気をいただきました。これからも「やさしさと思いやり」を持ち，患者さんに寄り添い，行き届いた看護を提供していきたいと思います。

（第一病棟３階　小山内由美子）

平成30年度ベスト研修医賞選考会開催

ベスト研修医に贈られたトロフィー

平成30年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が，平成31年2月22日に，医学部臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり，今回で15回目を迎えます。当日は，臼谷真理先生，木村温子先生，蓮井研悟先生（五十音順）の３名の研修医が，「ここがポイント！　研修医の心がけ」と題し，自分が研修生活の中で重視してきた事柄について，一人８分間ずつスピーチを行いました。聴衆は学生および教職員で，スピーチのあと参加した学生諸君による投票が行われました。投票の結果，蓮井研悟先生が平成30年度ベスト研修医に選ばれました。引き続き表彰式が行われ，蓮井先生に賞状，トロフィー，記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として，臼谷先生に「ベストパートナー賞」，木村先生に「レポート大賞」，蓮井先生に「セミナー賞」，鈴木幸雄先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。５年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われるとともに福田病院長から金一封が贈られ，会場は大いに盛り上がりました。当日は20名以上の学生諸君に加え教職員も含め総勢50～60名の参加があり，教職員，研修医，学生がみな，この１年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い盛会裏に終了しました。本賞がこれからも，研修医・教職員・学生の絆を強める役割を果たしてくれることを期待しています。

（卒後臨床研修センター長　加藤博之）

弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では，平成31年2月から平成31年4月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。（経理調達課）

寄附者ご芳名

蝦名 章 様

【 編集後記 】

南塘だより第94号をお届けいたします。ご多忙の中，原稿をお寄せいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

医学の進歩は目覚ましく，この6月からがんゲノム医療の推進に向け，保険診療として遺伝子パネル検査が可能となりました。本院はがんゲノム医療連携病院に選定されておりますが，保険診療の要件を鑑みると本院の体制はまだまだ脆弱であり，要件に則った体制強化に向けて鋭意努力してるところです。

今年のゴールデンウイークは10連休となったため，正月のような気分で令和という新しい時代を迎えました。本年度から附属病院再開発も始まり，大学に戻ってくる若い医師も増え，希望に満ちた時代の到来となりました。（広報委員会委員長　伊藤悦朗）